

周回する五行—服部中庸と巫部経彦—

山崎 好裕

福岡大学経済学部

WP-2020-004



福岡大学先端経済研究センター

# 周回する五行一服部中庸と巫部経彦一

山崎 好裕

## 概要

教派神道の神理教は日月五星の紋章を持つ。この紋章には近世の神道説が西洋天文学の知識を取り入れて、独自のコスモロジーを形成してきた伝統が生きている。天文学家であると同時に垂加神道を学んだ神道家でもあった渋川春海は、日本神話を下敷きにして宇宙と地球の関係を説明した。後期国学では服部中庸が、神々の世界が三つに分かれて、それぞれが太陽、地球、月になったという神話的宇宙論を提示して激しい議論を巻き起こした。平田篤胤はそれを完成させて、神道の宇宙観を確固たるものにした。巫部経彦はこうした宇宙観をベースに神理教を創始したが、太陽系の五つの惑星に神々を当て嵌めるなどの独自性がある。こうした試みは鶴峯戊申が行っており、巫部はそこから構想したと推測される。鶴峯と同時期、経世家の佐藤信淵は神道の宇宙論を理神論的なものに修正している。これは明治時代以降の殖産興業のイデオロギーとして機能していくものとなった。一方で神道のコスモロジーは日本人の信仰世界の合理化に寄与していった。

JEL 分類番号：B190, N950

キーワード：垂加神道、渋川春海、復古神道、服部中庸、平田篤胤、神理教、巫部経彦。

The Five Elements which revolve:  
Nakatsune Hattori and Tsunehiko Kannagibe

Yoshihiro Yamazaki

**Abstract**

Shinrikyo Religion is a sect of contemporary Shintoism. Its crest symbolizes the sun, the moon and five planets. This crest is the result of modern Shintoism's tradition in which scholars introduced the knowledge of western astronomy. Harumi Shibukawa, an astronomical scientist and theologian of Shintoism, explained the relationship between the earth and the space in the terms of Japanese mythology. Nakatsune Hattori, a late theologian, proposed a mythological cosmology that the only primitive heavenly body was divided into the sun, the earth and the moon. This proposal caused a heated argument among theologians. Atsutane Hirata completed this type of cosmology and established the basic thought of Shintoism. Tsunehiko Kannagibe started Shinrikyo Religion, a sect of Shintoism on the basis of the cosmology. He, however, uniquely made five planets correspond with gods' names. Earlier than this, Shigenobu Tsurumine did the same trial. Kannagibe was supposed to use his idea. In the same period of time, Nobuhiro Sato, an economist, remade the cosmology of Shintoism into that of deism. This thought functioned as ideology of economic development in Meiji Era. At the same time, the cosmology of Shintoism contributed for rationalization of Japanese people's spiritual lives.

JEL classifications: B190, N950

Keywords: Suika Shintoism, Harumi Shibukawa, Fukko Shintoism, Nakatsune Hattori, Atsutane Hirata, Shinrikyo Religion, Tsunehiko Kannagibe.

はじめに

教派神道十三派の一つ、神理教が一派独立を果たしたのは、明治 27 (1894) 年のことであつた。教祖である巫部経彦が神道事務局から教導職試補を申し付けられたのが明治 11 (1878) 年であり、神理協会開設願いが認められたのが明治 13 (1881) 年である。この後、本局直轄、御嶽教転属を経て苦心しての一派独立となつた。つまり、神理教は布教活動開始から 10 年以上の歳月をかけて独立教派の体裁を整えており、現在の日月五星の紋章もこの歳月のなかで考案され、一派独立時には存在していたと推測される。

日月五星の紋章は、五つの惑星を日月に併せて配置しているデザインが教派神道他派の神紋と比べて極めて近代的である。それは宗教者・巫部経彦の持っている独自のモダニズムを感じさせるものであると同時に、近世以来の神道説が西洋の自然科学に基づくコスモロジーを意識的に受け入れてきた系譜に連なるものでもある。本稿はその系譜を追いながら、明治以降の日本が近代西洋文明を極めて精力的、かつ、スムーズに受け入れてきた精神的基盤がモダナイズされた神道説にあつたかもしれないという仮説を提起する内容となっている。

本稿では、まず、山崎闇齋門下の神道家であり、同時に天学家として幕府に貞享暦を採用させた渋川春海を取り上げる。春海の日文学は闇齋の五行説を思想的基盤として取り入れており、その後展開される神道のコスモロジーを準備するものとなつた。

次いで取り上げるのは、本居宣長に激賞され、『古事記伝』に付録として収録された『三大考』を著した服部中庸<sup>なかつね</sup>である。『三大考』が示したのは、天地泉<sup>よみ</sup>からなる宇宙論的神話世界であつた。中庸はさらに『七大考』を著し、五星と地球が太陽の周りを運行し、月が地球の周囲を、衛星が木星と土星の周囲を周回する、全くの西洋日文学からの知識を、記紀の神話世界と直結させて見せた。平田篤胤はその復古神道説のコスモロジーを『靈能真柱』に表現している。そこで篤胤は『三大考』の中庸を批判的に継承している。神理教の経彦を含め、明治期の神道家の多くが篤胤の影響下にあることは言うまでもない。

しかし、経彦のコスモロジーには五星の神話的役割の強調に代表されるような独自性がある。本稿が仮説として提起しているのは、豊後臼杵<sup>しげのぶ</sup>の国学者・鶴峯戊申からの影響である。この検証が、経彦の『本教神理図解』と戊申の『天の美波しら』の比較を通じて行われる。

神道説へのこうした西洋コスモロジーの導入は、結果として、明治期の日本人の精神世界の合理化過程と通底していたものと考えられる。これが日本近代の急激な西洋化と経済発

展をもたらしたことは間違いなく、そういう意味での現実主義的イデオロギーは幕末の経世家・佐藤信淵に見られたものであった。ただ、本稿が問題にしたいのは、日本人の精神の合理化が神理教など教派神道に見られる信仰世界の近代化においても、位相を変えながら進行していたという事実なのである。

## 1. 天文学家・渋川春海と垂加神道の五行説

渋川春海の天文学家としての著作に『天文瓊統』がある。同著は元禄 11 (1698) 年に全 8 巻本として出版されたが、それから 2 年後に出版された神道家としての著作『瓊矛拾遺』<sup>1</sup> との書名の類似にまずは注目すべきだろう。天文書の方は珠のような天体が連なっているイメージを表しているが、それは国生みに際して伊弉諾と伊弉冉が混沌を掻き回した天の瓊矛にも掛けていると目される。つまり、彼の天文学家としての宇宙観にも垂加神道のそれが根本的なところでオーバーラップしているということなのである。

天文書の巻 1 の冒頭で春海は次のように述べる<sup>2</sup>。

天体は渾沌、清陽にして質なし。玄くして形あるにあらず。大にして外なし。気、動いて息まざるなり。その一物なきもの、これを天と謂ふ。その物あるや、陰陽五行の精なり。そのもと地にありて、上、天に発するもの、これを天の文と謂ふなり。万物の精、上に発見して、昭昭として知るべきものは、経星なり。経星の運転するゆゑんは天文学家すなはちこれを天と謂ふのみ。その列星は瓊の統のごとくなり。

天は実体を持たない虚空であって、外側を持たない。天に散りばめられた明るい恒星は珠を連ねたように運航している。こうした空間のなかに、地球が浮かんでいるというのが春海の宇宙であった。

---

<sup>1</sup> 志水 (2014) によれば、春海はこれを「ぬぼこしゅうい」ではなく「とぼこしゅうい」と発音していた。

<sup>2</sup> 渋川 (1971)、110 ページ。

地体は重濁の滓にして、渾沌の内に凝り、至静、確然として易らず。よく空に浮かんで、墜ちず。四面、みな人畜・草木生ず。土は方にあらず円にあらず。山谷の形、すなはち土なり。水、土に浮かび、合して一球となるものか。

春海は大地が四角でも円盤でもなく球体であることを認識していた。そして、地球は大地の上に海水が載って全体が球形をなし、その表面に人間や動物、植物がいるというのだ。こうした近代的な宇宙観を持っている一方で、春海の叙述は神道家としての知識に導かれている。『日本書紀』巻1の冒頭にこうある<sup>3</sup>。

古に天地未だ割れず、陰陽分れざりしとき、渾沌<sup>まろか</sup>れたること鶏子の如くして、溟滓<sup>ほのま</sup>にして牙を含めり。其れ清陽なるものは薄靡<sup>うす</sup>きて天と為り、重濁れるものは淹滞<sup>うづ</sup>みて地と為るに及びて、精妙なるが合へるは搏<sup>むら</sup>り易く、重濁れるが凝りたるは竭<sup>かた</sup>り難し。故、天先づ成りて地後に定る。然して後に、神聖、其の中に生れます。故曰はく、開闢<sup>あめつちひら</sup>くる初に、洲壤の浮かれ漂へること、譬へば游魚の水上に浮けるが猶し。時に、天地の中に一物生れり。状葦牙の如し。便ち神と化為る。

さらに、春海の叙述には、神話の反映にとどまらず、闇齋から学んだ垂加神道の気質の議論が混入している。両者を併せて、西洋天文学からの知識を加えれば、これはもはや春海の宇宙観である。闇齋の神道論としては最も簡潔にまとめたものに『垂加社語』がある。闇齋は『日本書紀』冒頭の神名の羅列を陰陽五行説になぞらえて次のように記述している<sup>4</sup>。

天神第一代は天地一気の神、二代より六代に至りてこれ水火木金土の神、第七代は即ち陰陽の神なり。

『日本書紀』の本文では、最初に現れた神は国常立尊である。次は国狭槌尊、そして、豊斟淳尊と続くが、三神は独神であった。その後は男女の神となり、泥土煮尊・沙土煮尊、大戸之道尊・大苦辺尊、面足尊・惶根尊、伊弉諾尊・伊弉冉尊と続いていく。闇齋の記述は、

---

<sup>3</sup> 坂本他 (1994)、16 ページ。

<sup>4</sup> 平他 (1972)、122 ページ。

吉田神道に集大成された中世神道説をそのまま継承したものであり、神代七代の二代から六代への五行の配当にももちろん変更はない。

闇斎は朱子学者として、朝鮮性理学の基礎を築いた李退溪に強い影響を受けていた。そのことを理解するには次の記述がわかりやすい<sup>5</sup>。

水火木金土みな気あり質ありて、氣質各陰陽あり。気は虚にして質は実なり。質を以てこれを観るに、水火はなほ虚にして木金土は正に実なり。それなほ虚なるを以て、これを一気の神に属して、三神乾道独化、純男<sup>ひたをとこ</sup>を成せりと日へり。

朱子学では世界の成り立ちを理気説で解き明かす。宇宙の原理たる理が万物の質料である気に現れる。気そのものかたちはないが、物質化すれば目に見え、手で触ることもできる。かたちがないという意味で、元の気と水、火は一つのまとまりを成し、物質性を持つ木金土とは区別されるのである。

陰陽そのものの神格化である伊弉諾と伊弉諾は磯馭慮島に天下り、柱を巡って婚姻の契りを結ぶ。春海は『日本書紀』をそのまま引用しながら、次のように書いている<sup>6</sup>。

陽神は左旋し、陰神は右旋し、国の柱を分れ巡りて、同しく一面に会ひき。これ神代より説き伝はる。実にみな左行なり。(中略) それ天は一物なくして空なり。気運りて、天運を得、経星・七政、気に随ひて転ず。その経星を見得て、みな天行となす。七政は天行に及ばず。その遅きはこれ質の重きの故か。しかるに五星に逆行あり。その運転、天行より速やかなり。

恒星は天とともに回転するのだが、日月<sup>7</sup>と五星はそれとは異なった動きをする。春海は天体の重さの違いが原因であると推測している。さらに、春海は五星の逆行に注目した。し

---

<sup>5</sup> 同上。

<sup>6</sup> 広瀬他 (1971)、124 ページ。

<sup>7</sup> 太陽の運航について、春海には不思議な神話的説明がある。すなわち、太陽が冬至に天の最も南を運行することを底筒男、夏至に最も北を運行することを表筒男、春分と秋分に真東から出て真西に沈むことを中筒男と呼ぶのである。この三神は伊弉諾が禊をした際、三海神とともに誕生し、住吉大神として祀られている。

かし、五星を五行と結び付ける記述はまだ春海には見られない。また、春海は地球の周りを天が囲み、日月五星と恒星が回転する天動説を前提にしていた。これが後期国学のなかで太陽を中心とした地動説へと転回を遂げていくことになる。

## 2. 『三大考』、『靈能真柱』、そして『九大考』

和歌山藩士であった服部中庸は、生誕地である松坂の本居宣長に国学を学び、寛政3(1791)年、『三大考』を完成させた。同書は師の宣長に激賞され、寛政9(1797)年に『古事記伝』十七之卷附録として刊行された。以降、同書が神道のコスモロジーを巡る、国学者間の激しい議論の焦点となっていく。

中庸は『古事記』に従い、宇宙の始まりに先ず造化三神が現れたとするが、それは何も無い「虚空」<sup>おほそら</sup>においてであったと言う。宇宙にはやがて一つの兆しが現れ、そこに宇麻志葦牙比古遲神と天之常立神が生じた。宇宙の兆しからは上へ伸びあがるものがあって、それは後の天となり、下っていくものもあって、それは後の泉<sup>よみ</sup>となった。真中は地となって、こうして瓢箪を逆さまにしたような世界が虚空に浮ぶことになる。その地に現れたのが、国之常立神、豊雲野神、宇比地邇神・須比智邇神、角杵神・活杵神、意富斗能地神・大斗乃弁神、淤母陀琉神・阿夜訶志古泥神、伊邪那岐神・伊邪那美神という七代の神々である。

伊邪那岐が泉から帰って禊をした際、天照大御神、月読命、須佐之男命の三貴神が生まれ、それぞれが高天原、夜食国、滄海原を治めるように父神から命じられる。しかし、中庸は師・宣長の『古事記伝』九之卷での所説を継承して、月読と須佐之男を同一神としている。その根拠の一つとして中庸があげるのが、『日本書紀』で月読が「滄海原潮之八百重」を治めるように命じられていることである。

瓢箪をひっくり返したかたちに繋がっていた天地泉はやがて、熟した実が枝を離れるようにして一つずつに分離していった。地続きであったころの地と泉の境が「黄泉比良坂」であり、地と天もまた「天之浮橋」によって結ばれていた。浮橋の天側のたもとはいくつかの道に分かれていて「天之八衢」と称された。分離した天地泉が太陽、地球、月として旋回を始める様子を、中庸は次のように書いている<sup>8</sup>。

---

<sup>8</sup> 倉野 (1944)、411 ページ。



初は天地泉として三珠を貫きたる如く、帯つゞきて、天はいつも地の頂上に在。泉はいつも地の下方に在て、共に動き轉<sup>うつ</sup>ることはなかりしに、皇御孫命の既に天降坐て、天下を所知看時に至て其つゞきたる帯絶<sup>きん</sup>はなれて、正しく三つとなる。是よりして、天も泉も、地を中におきて、恆に相旋ること、今の現のごとし。

『三大考』を終えるにあたって中庸は、日本の神話に星々のことが出てこないことに疑問を呈している。ただ一つの例外が『日本書紀』に出てくる星神・香々背男であると言う。

中庸は文政6(1823)年、宣長門下の城戸千楯が京都錦小路に開いた鐸屋<sup>ねでのや</sup>で平田篤胤と出会い、義兄弟の契りを結ぶまでになるが、その翌年、病没した。これに先立つ10年前、篤胤は、『三大考』に全面的に依拠して自らの宇宙論を全面的に展開した著作『靈能真柱』を出版していた。

篤胤は同書のなかで『三大考』のコスモロジーにいくつかの変更を加えている。まず、篤胤は中庸が地に現れたとする七代の神々を泉に生じたと修正する。篤胤によれば、国之常立神は正しくは国之底立神である。また、豊斟淳神も芽ぐみ下って成った神格なので泉の神であるとする。以下、宇比地邇神・須比智邇神、角杵神・活杵神、意富斗能地神・大斗乃弁神、淤母陀琉神・阿夜訶志古泥神まで皆泉の神々である。

こうした修正を加える一方で、篤胤も中庸の月読・須佐之男同一神説を継承する。須佐之男が治めるように言われた青海原は実際には地全体を意味しており、「青海原潮の八百重」という言い方はその広さを強調した表現である。しかし、須佐之男は伊邪那美のいる根の堅洲国に行きたいと泣いたので泉を任せられることになった。そして、黄泉の統治者として月夜見命と改名したのだとする。

篤胤もまた星神・香々背男のことを取り上げ、『日本書紀』で卑しい神として扱われていることから、恒星や惑星のような細かな星々は神道のコスモロジーのなかで重要性がないものとして切り捨てている。だが、次のようにくどくどと述べている<sup>9</sup>ことから、実は篤胤が西洋天文学に大いに関心があったことが窺えるのである。

所謂五星は、各々の国土なりと云ふばかりは、然もありげなれど、是も実は空論なる

---

<sup>9</sup> 子安(1998)、148ページ。

が上に、所謂恒天に見ゆる、微かなる星どもを、並、天日の如き物ぞなどいふを始め、その説まちくにて、考へ究むることあたはず。

だが、篤胤が宇宙の全貌について考え得たとしても結局詮無きわざと自分に言い聞かせていたころ、中庸はまさに、篤胤があきらめた方向へと思索を進めていた。その成果は終に刊行されなかった書物『七大考』としてまとめられたが、本居大平の述懐に基づけば、文化10(1813)年ごろには書き始められていたと推測できる<sup>10</sup>。これは奇しくも『靈能真柱』の出版年だから、直接出会う10年前から既に、中庸と篤胤がお互いの研究を強く意識し合っていたことがわかるのである。

『七大考』は失われてしまった部分が多いが、そのなかの「天地五星運動旋轉并五星出生之考圖説」<sup>11</sup>を読むことができる。本書の中心的な革新は、太陽を中心とする太陽系諸惑星の円運動を神話と対応させたことである。冒頭に、太陽が中心となっているのは、そこが天津神の御許だから当然であるという記述がある。

これにともなって、『三大考』での上下の序列関係が中心と周辺の序列関係に置き換えられる。高天原は太陽であって太陽系の中心をなす。そのいちばん近くを公転する水星は、天と地をつなぐ道である「天之八衢」のことである。次の金星は、『三大考』でも『靈能真柱』でも唯一の星神として言及のあった香々背男が「宇志波都流国」とされる。その周りをこの地球が公転するが、地球の外側の火星こそ黄泉または根之国であるとされる。こうして、黄泉と月は別物とされ、地球の周りを巡る月には、中庸から篤胤へと議論が続いていた「滄海原潮之八百重」が当てられる。

木星と土星は神話に言及が全くないというのが、中庸の認識である。その理由として中庸は、地球に対する月のように、いくつかの小星を従えている二つの巨大な惑星が、また我々の物とは別の世界を構成している可能性をあげる。西洋人は望遠鏡でその別世界を覗いているが、我々地球人には詳細はわからないというのだ。だから、神話のなかで情報を伝えることもできなかった。

こうした中庸の晩年の思索は、結局、国学者仲間から忘却される運命にあった。しかし、中庸の前期の発想を元にして、篤胤が『靈能真柱』で体系化した神道のコスモロジーは、幕

---

<sup>10</sup> 金沢(2005)、229ページ。

<sup>11</sup> 中庸の自筆本は個人蔵であるが、東京大学本居文庫に同内容の写本がある。

末・明治期の神道思想の展開に決定的な影響を与えていくことになる。

### 3. 巫部経彦と神理教のコスモロジー

医師として出発した巫部経彦にとって、漢方医学が依拠する陰陽五行説は馴染みのものであったはずである。神理教の教義の中心に位置する「本教神理図」には、太陽のなかに別天神と呼ばれる、天之御中主神、高皇産巢日神、神産巢日神、宇麻志阿志詞備彦遅神、天之常立神がいるとされる。一方、月には、篤胤が本当は国之底立神であるとした国常立神がいる。神理教に特徴的なのは五星に開闢の五代の神々が配当されることである。

経彦は明治16(1883)年に『本教神理図解』を発表したが、このなかで五星の神々が詳細に説明されている。まず、豊雲野神は雲ということから水気を表し、水星の主宰神であるとされる。五星の神々は、何々星に「入りたまひ」と書かれていることから、おそらく、他所で生じて別天神から五星の主宰を託されたという経彦の認識なのであろう。宇比地邇神・須比智邇神は土星の主宰神である。角杙神・活杙神は木星の、意富斗能地神・大斗乃弁神は火星の主宰神である。ここまでは神名からの連想と思われる。面足神・惶根神は感嘆詞が神名になったものだから、残された金星の主宰神になったのだろう。

五代の神々の五行への配当は、吉田神道や垂加神道にも見られたものである。しかし、これを五星と結び付ける発想は渋川春海にはなかった。また、開闢五代の神々を神道のコスモロジーに精密に結び付ける考えは、服部中庸や平田篤胤には見られない。それでは、経彦はどこからこの着想を得たのだろうか。

極めて類似した、そして、後期国学の宇宙論と開闢五代を初めて結び付けた人物として、本稿は鶴峯戊申をあげたい。戊申は豊後臼杵に神官の息子として生まれ、国学者として江戸で没している。戊申は文政4(1821)年、著作『天の美波しら』を出版している。同書は古今東西の宇宙論を批判的に紹介した上で、最後に神道のコスモロジーの優位性を主張している。戊申は経彦より半世紀以上早いこの著作で、経彦と同じく主宰という言い方で開闢神たちと太陽系の天体とを結びつけているのである。

まず、国之常立神であるが、戊申は篤胤同様、常を底と考え、地の極底は土星であるとする。次に豊雲野神であるが、戊申は雲を植物が「芽ぐむ」ことに通じるとし、同神を木星の主宰神に充てる。宇比地邇神・須比智邇神は火星の主宰神であるのだが、神名が土と水とを

掻き混ぜたものとしているのは、火で煮炊きする竈を泥で作るイメージであろうか。角杙神・活杙神は葦などの生育する「角ぐむ」という言葉と結び付けられ、生命溢れる地球の主宰神とされた。意富斗能地神・大斗乃弁神は金星の主宰神とされるが、理由は審らかではない。最後に淤母陀琉神・阿夜訶志古泥神の神は、水星の主宰神である。水星は太陽にいちばん近く、直面していることを「面足」というのだとする。このように、戊申は、太陽系の惑星の公転軌道が太陽から遠い順に神々を配当しているのである。中庸の『七大考』で、『三大考』の上下の秩序が中心と周辺の秩序に変換されていたことを見た。戊申はあらためて、周辺を底、中心を頂上として、下から上へと積み上げ式に神々を並べているということなのだ。

戊申の説は津和野の国学者・岡熊臣によって杜撰の説と批判されたが、太陽系を対象とした神道のコスモロジーの一つの完成形であることは否定できないと思われる。この意味で、教派神道のなかで教義の理論的完成度を最も追求していた神理教の経彦が、そこから影響を受けたであろうことはおそらく間違いない事実なのである。

おわりに

『三大考』や『靈能真柱』の強い影響下で独自の宇宙論を展開した経世家・佐藤信淵について、最後に取り上げてみたい。信淵は自分の研究を文政5（1822）年からの数年間に『天柱記』という著作にまとめた。宇宙の最初を信淵は次のように叙述する<sup>12</sup>。

産靈大神天瓊戈ヲ指下シテ、彼一物ヲ攬回シ、宇内ノ大氣ヲ渦ノ卷ガ如ク転輾西ヨリ東ニ旋ラシム。

この回転によって、太陽を真中に残して地球や五星が周辺に分離し、さらにそのまま公転運動になったのである。地球の自転運動についても次のように説明される<sup>13</sup>。

---

<sup>12</sup> 尾藤他（1977）、374 ページ。

<sup>13</sup> 同書、379 ページ。

初メ大地ノ漂蕩シ時ニ、皇祖天神、伊弉諾・伊弉冉二神ニ詔シ、天瓊戈ヲ賜テ此ヲ修造セシム。二神其戈ヲ以テ地球ヲ攪回シ、其既ニ凝定スルニ及テ、乃チ其戈ヲ衝立テ地中柱ト為シ、以テ天之御柱ニ見立ツト云フ。

地球は最初ふわふわしていたのだが、二神が掻き回すことによって凝集して、その回転がそのまま地球の自転になった。

このように、信淵の宇宙論で神は最初の一撃を宇宙に与え、後は神の手を離れて宇宙は法則的な運動を続けるのである。これは完璧な理神論の世界観であり、その法則性を理解して産業の振興に役立てることこそ、経世家としての信淵の目的であった。つまり、信淵にとって神道は自説の体系化のための手段であって目的ではない。かくして、信淵が中庸や篤胤から学んだ神道のコスモロジーは、幕末明治期の殖産興業のイデオロギーとして利用される方向が示されることになった<sup>14</sup>。

一方、巫部経彦は復古神道の流れをそのまま受け継ぎ、神理教を近代的な信仰に脱皮させるために西洋天文学の知識を活用したのだと言えよう。つまり、信淵とは目的と手段の関係が逆になっている。いずれにしても、世界の合理的な理解とその経済への利用が、日本の伝統的な信仰である神道に思想的にサポートされることで、明治期以降の日本人に素直に受け入れられることが可能になったと言えるのである。

#### 【参考文献】

岡本雅享『千家尊福と出雲信仰』ちくま文庫、2019年。

金沢英之『宣長と「三大考」』笠間書院、2005年。

倉野憲司校訂『古事記伝』(四) 岩波文庫、1944年。

子安宣邦校注『霊の真柱』、岩波文庫、1998年。

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀』(一) 岩波文庫、1994年。

志水義夫「天文学者と神の道—渋川春海の学問と思想—」、田尻祐一郎他著『文学の思想 儒

---

<sup>14</sup> 神道と殖産興業の結びつきは、第80代出雲国造・千家尊福の活躍に見ることができる。尊福は若くして明治の神道行政に深く携わったが、祭神論争を機に大社教の管長に転ずる。さらに、埼玉県、静岡県、東京府の知事などとして、産業の振興や農業の生産性向上に手腕を発揮した。尊福の活動の全貌は岡本(2019)に詳しい。

学、神道そして国学』第1章、11-57 ページ、東海大学文学部叢書、2014 年。  
平重道・阿部秋生校注『近世神道論 前期国学』日本思想体系 39、岩波書店、1972 年。  
尾藤正英・島崎隆夫校注『安藤昌益 佐藤信淵』日本思想体系 45、岩波書店、1977 年。  
広瀬秀雄・中山茂・大塚敬節校注『近代科学思想 下』日本思想体系 63、岩波書店、1971  
年。